様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：若手研究(A)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｈ０５３７７

研究課題名（和文）コンテンポラリーダンスにおける「デモクラシー」の系譜学

研究課題名（英文）Geneology of democracy in contemporary dance

研究代表者
越智　雄磨（OCHI, Yuma）

愛媛大学・法文学部・講師

研究者番号：８０７３２５５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,300,000円

研究成果の概要（和文）：旧来のダンスに内在化された慣習的なコードを拒絶し、90年代半ばに大きな議論を巻き起こした「ノン・ダンス」という概念に注目し、振付家、ダンサー、観客という固定化された関係性に生じた変化を考察した。文献調査、作品分析、インタビュー調査などを通じて、コンテンポラリーダンスが、1980年代に称揚された「作者のダンス」から1「作者の死」後のダンスへと移行したダイナミックな変化を捉えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1980年代のフランスのコンテンポラリーダンスは、作者の思想やメッセージを作品に結晶化するタイプの「作者のダンス」が多く見られたが、90年半ば以降には、従来の「ダンス」や「作品」という概念そのものを疑う「ノン・ダンス」という傾向が生じた。ダンスを否定するものとして誤解されたこの動向は、実際には、ダンスの概念を拡張したものであり、「作者のダンス」が重視してこなかったダンサーの個人性や主体性、観客の参加や関与を取り込むことに注力していた。結果として、コンテンポラリーダンスが主体という哲学的問いや社会モデルの構築に貢献しうることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the notion "non-danse" which rejected the conventional codes of typical dance and brought about disputes in the milieu of french contemporary dance. The "non-danse" has updated some notions about dance and the relationship between choreographer, dancers, and spectators. Through the study of documents, works, and interview with some choreographers and researchers, this study could grasp the dynamic change from "danse d'auteur" to the dance after "the death of the author"(Barthes).

研究分野：舞踊学、美学、芸術学

キーワード：コンテンポラリーダンス　ノン・ダンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

フランスでは 1980 年代以降、国と地方自治体が主導し、ダンサーの教育機関である国立現代舞踊センター（以下 CNDC）や舞踊作品の創造の拠点である国立振付センター（以下 CCN）を国内各地 19 箇所に設立してきた経緯がある。「文化の民主化」を綱領としたフランスの文化政策は他の芸術分野と同様にダンスに対しても他国に類を見ないほど手厚い支援を施し、結果としてフランスのコンテンポラリーダンスは著しい発展を遂げた。しかしながら、1990 年代後半には文化政策がもたらした弊害や美学的停滞を指摘する声がダンス研究者や批評家、振付家、ダンサー達から上がるようになる。彼らは、**「8 月 20 日の署名者達」**という任意団体を結成し、フランス文化省のダンスへの助成方針に異議申し立てを行う他、CNDC や CCN が教育、促進してきたダンスの慣習的な美学を否定するような作品を作り始めた。つまり、90 年代のコンテンポラリーダンスに関して、ダンスを取り巻く公的な制度に関わる**政治的転換**と実践的な芸術形式に関わる**美学的転換**が相互に関連しながら生じたと言える。そのような過程を紹介する代表的な文献としてドミニク・フレタールの『コンテンポラリーダンス－ダンスとノン・ダンス 25 年の歴史（D*anse contemporaine : Danse et non-danse vingt-cinq ans d'histoire*）』(2004, Paris : Cercle d'Art)が挙げられる。

フレタールは従来の文化政策がもたらした**政治面**、**美学面**の双方の停滞状況を解消しようとして 90 年代にダンス界に現れたこの新たな傾向を「ノン・ダンス」と呼び、80 年代の文化政策に寄り添いつつ発展してきたコンテンポラリーダンスと区別した。ただし、フレタールの先行研究は示唆に富むものの、調査や分析、考証が十全に行われているとは言えず、「ノン・ダンス」という概念及び芸術上のムーブメントには依然として曖昧さが残されていることが問題として挙げられる。さらに「ノン・ダンス」の振付家はフランスのみならず、ヨーロッパを中心とした国際的な舞台芸術シーンにおいても頻繁に紹介され、新たな芸術潮流の担い手として強い存在感を放っているにもかかわらず、**日本ではそれに関する研究は全くなされていない。**申請者は、国内外で立ち後れている「ノン・ダンス」を巡る研究の発展に寄与するべく⑴**政治的観点**、⑵**美学的観点**、⑶**舞踊史的観点**という３つの観点を設定し、欧米の先行研究者たちが注目しなかった資料に基づいてより確かな根拠を示すことで、より包括的で洗練された「ノン・ダンス」像を描き出すことを目指してきた。これまでの研究では、「ノン・ダンス」について政治的観点からは、**「8 月 20 日の署名者達」**の活動に焦点を当て、彼らがダンスを巡る文化政策が CCN に偏重した支援していることを問題視し、より「民主的な」支援の必要性を文化省に訴えていた事を明らかにした。美学的観点からは、「ノン・ダンス」の代表的な振付家と言われるジェローム・ベルとグザヴィエ・ル・ロワの作品について先行するフランスのダンスとの美学的な相違について明らかにした。舞踊史的観点からは、「ノン・ダンス」が、1960 年代以降にアメリカで生まれた舞踊の傾向であるポスト・モダンダンスの理念と実践から強い影響を受けており、それを参照項としながらフランスで制度化されたダンスの規範から逃れようとしていたことを明らかにした。

２．研究の目的

この研究では、上述の研究背景からさらに一歩踏み込んで「ノン・ダンス」と呼ばれる傾向の本質とそれがなぜ生まれたのかを理解するために、また 20 世紀半ば以降の舞踊史におけるそのインパクトを理解するために、フランスの文化政策において重要視されてきた「民主化」及び「デモクラシー」を一つの切り口として、政治的観点、美学的観点、舞踊史的観点

から研究を進めたい。

３．研究の方法

【研究 A 政治的観点からの研究：文化の民主化と「8 月 20 日の署名者たち」】

政治学者マルク・フュマロリの研究『**文化国家―近代の宗教**(*L'état culture-Une religion moderne*)』(1991, Paris, éditions de Fallois)によれば、フランス文化省は 1951 年に設立されて以来、**「文化の民主化」**を基本綱領として文化芸術を振興してきた。だが、この概念は各時代の政府によって様々に解釈され、多様な文化政策が実施されてきた経緯がある。研究 A では、フランスでコンテンポラリーダンスが振興され始めた 1980 年代以降に「文化の民主化」がいかに解釈されてきたか、その変遷を明らかにし、1997 年から 2001 年に渡って当時の文化政策に異議を唱えてきた「8 月 20 日の署名者たち」の活動をフランスの文化政策の流れの中に位置づけ、彼らにとっての「民主化」がどのようなものであったかを考察した。

【研究 B 美学的観点からの研究：「ノン・ダンス」の作品における「関係の民主化」】

これまでに行ってきたジェローム・ベルとグザヴィエ・ル・ロワの作品研究を通して、「ノン・ダンス」の振付家の作品には「観客とのコミュニケーション」という特質が顕著に見出されることを発見した。そして、こうした観客の存在を重視する「ノン・ダンス」の理論的背景として、芸術の価値が「作者」の創造する「作品」に内在する理念の内にあるのではなく、「観客」の想像力を通じて作品の価値が多様に産出されうるというロラン・バルトの「作者の死」が存在していたことが判明した。換言すれば、「ノン・ダンス」は作者と観客の関係の民主化に力点を置いていると言えるが、ここではより詳細に、それぞれの振付家や作品による**「関係の民主化」**を実現する方法やその効果について考察した。

【研究 C 舞踊史的観点からの研究：「ノン・ダンス」とポスト・モダンダンスをつなぐ「民主主義」】

「ノン・ダンス」における「関係の民主化」を重視する態度や方法については、1960 年代に公民権運動を背景に「デモクラシーの身体」を体現したと言われるアメリカのポスト・モダンダンスからの影響もあった。その理由の一つとして「民主化」を重視したフランスの文化政策とポスト・モダンダンスに親和性があったからだとと考えられる。実際に 70 年代以降、パリ・オペラ座や CNDC といったフランスの公的機関はアメリカのアメリカの振付家やダンサーを積極的に招聘してきた歴史がある。彼らがフランスでいかなる活動を展開し、フランスのコンテンポラリーダンスにおける「民主的」という価値観の形成に影響を与えたのかを考察した。

４．研究成果

コンテンポラリーダンスは、「文化の民主化」 を綱領とした文化政策に後押しされて 1980 年代以降、爆発的に発展したが、より時代を遡れば、1968 年 5 月革命後に、既存の権威や美学を疑う風潮とともに新しい時代の身体表現として勃興した。しかし、80 年代に国の文化政策の支援対象となったことで、国内各地に国立振付センターが設立され、当初の性質とは裏腹に次第

に制度に包摂されていった過程が明らかになった。そこで問題となったのが、コンテンポラリーダンスの「アカデミー化」であった。 コンテンポラリーダンスは、17 世紀に設立された王立舞踊アカデミーに起源を持つバレエとは反対に、本来、自由かつ新たな実験的な創作を行うことに本分があったとされる。しかし、制度に包摂される過程で、ダンス作品の有様が固定化し、振付家とダンサーの間に明確なヒエラルキーが生じた点などが、批判にさらされるようになる。このようにコンテンポラリーダンスの停滞が明確になった 90 年代半ばに現れたコンテンポラリーダンスの第二波が゛「ノン・ダンス」と呼ばれる潮流である。「ノン・ダンス」の世代の舞踊家達は、舞踊史的には 1960 年代に誰もが対等に参加しうる「民主的な」ダンスを掲げたアメリカのポスト・モダンダンスを参照し、その創作方法や理念に大きな影響を受けた。また、美学的には、五月革命期に発表されたロラン・バルトの「作者の死」等、旧来の芸術の作者 の立ち位置に疑問を付した理論を応用して創作を行っていることが観察された。さらにそれらの作品を批評するにあたって、複数の批評家が「民主的」という価値基準を適用して測ろうとしていることも明らかになった。創造と批評の双方において、振付家とダンサー、あるいは観客との間に「民主的な関係」が築かれるか否かを基準として作品を評価する動向が生じ、多様性の称揚といった社会的課題と連動した新たなダンスの創造/評価の基準が確立されたことが明らかになった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 越智雄磨	４．巻 2017年12月20日
２．論文標題 数々の論争を巻き起こしたジェローム・ベルが見せる、失敗と奇跡	５．発行年 2017年
３．雑誌名 CINRA.NET	６．最初と最後の頁 webのためなし
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 越智雄磨	４．巻 72
２．論文標題 ジェローム・ベル『ガラ』ー喜びにあふれた多様性が共同体を成立させる	５．発行年 2017年
３．雑誌名 埼玉アーツシアター通信	６．最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 越智雄磨	４．巻 12/10発行号
２．論文標題 「失敗」と「成功」の境界が揺らぐーアマチュアたちが出現させる奇跡の舞台	５．発行年 2017年
３．雑誌名 Intoxicate	６．最初と最後の頁 6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 越智雄磨	４．巻 40
２．論文標題 ノン・ダンスにおける生存の美学 ―フランスのコンテンポラリーダンスにおけるパフォーマンス的転回について―	５．発行年 2016年
３．雑誌名 演劇研究	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 越智雄磨	4．巻 1
2．論文標題 ドゥクフレー未来を切り拓くイリュージョニスト	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『ミュージカル　わたしは真吾』	6．最初と最後の頁 10-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 越智雄磨	4．巻 1
2．論文標題 振付小史：振付のアクチュアリティの定位に向けて	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Who Dance?　振付のアクチュアリティ	6．最初と最後の頁 10-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 越智雄磨	4．巻 1
2．論文標題 ダンスにおける空間・視覚・経験の変容－50年後のデモクラシーの身体	5．発行年 2015年
3．雑誌名 Who Dance?　振付のアクチュアリティ	6．最初と最後の頁 118-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 越智雄磨
2．発表標題 トリオAの経年変化 ―終焉したダンス、あるいは終焉しなかったダンスについて―
3．学会等名 イヴォンヌ・レイナーを巡るパフォーマティヴ・エクシビジョン（招待講演）
4．発表年 2017年

１．発表者名 Yuma Ochi
２．発表標題 Emergence of contemporary ballet in the Ballet de l ’Opera de Paris : On the intervention of Jerome Bel
３．学会等名 Society of Dance History Scholars（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 越智雄磨
２．発表標題 踊りの主体はどこにあるのか？―オーサーシップから見る振付概念の変容
３．学会等名 国際シンポジウム「ダンスという概念の現在形」（東京ドイツ文化センター、ドイツ研究振興協会）（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Yuma Ochi
２．発表標題 Coexistence with the Dead ―A working hypothesis on Ko Murobushi ’s notion of the “outside”―
３．学会等名 Seminario Archivo Ko Murobushi(Centro Nacional de las Artes, Mexicocity)（招待講演）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

１．著者名 越智雄磨ほか（編著）	４．発行年 2015年
２．出版社 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館	５．総ページ数 247
３．書名 Who Dance? 振付のアクチュアリティ	

１．著者名 越智雄磨	４．発行年 2020年
２．出版社 国書刊行会	５．総ページ数 256
３．書名 コンテンポラリー・ダンスの現在	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ジェローム・ベルによるレクチャー・パフォーマンス「ある観客」
https://www.waseda.jp/top/news/22586
老若男女が踊るコンテンポラリーダンス「Re : Rosas !」
https://www.waseda.jp/top/news/30663
演劇博物館秋季企画展「Who Dance? 振付のアクチュアリティ」オープンに寄せて
http://www.yomiuri.co.jp/adv/wol/culture/151029.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考